父に生きた人！！子から父へ！！
「～土台と芯のある生き方～」

出エジプト32章

韓国での様子

先週韓国宣教が行われ、韓国からメッセージが届けられました。韓国の教会の大きさも、人の多さも、信仰の熱さも日本とは異なっていました。韓国と日本は同じ頃にキリスト教が伝わりましたが、韓国と日本でキリスト教の普及には差がありました。日本は布教後、経済成長し、豊かになりました。その頃、韓国は貧しく、子ども達を育てるのも必死で、本気で神様に祈り、委ねるしかなったからではないかと話されていました。豊かになり、贅沢が当たり前となり、少しの不足で文句を言う弱さは私達にはないでしょうか？

過去の失敗を

満員電車の中でくしゃみをしたら、近くに立っていた男性のコートに鼻水がついてしまったのに、それを言い出せなかった失敗談を話して下さいました。その時、謝れなかった後悔が今も心に残っていると言われていました。自分のしてしまった失敗からしてしまった間違った行いをずっと悔いて生きる人生になっていないでしょうか。

アロンのリーダーシップの放棄

リーダーであるモーセがいなくなった40日間。神様の奇跡を体験し、救いの喜びを得たのに、不安になったイスラエルの民は、他の神を造ってほしいとアロンに詰め寄りました。

『民はモーセが山から降りて来るのに手間取っているのを見て、アロンのもとに集まり、彼に言った。「さあ、私たちに先立って行く神を、造ってください。私たちをエジプトの地から連れ上ったあのモーセという者が、どうなったのか、私たちにはわからないから。」』(32:1)

モーセがいない間、一人で民の問題に向き合っていたアロンは、男達に女と子どもから金を集めて持ってくるように命じ、金の仔牛を造りました。指導者としてのアロンは民を喜ばせようとして深刻な妥協をし、不信仰な民の圧力と影響に負けてしまったのです。

『彼らは、「イスラエルよ。これがあなたをエジプトの地から連れ上ったあなたの神だ」と言った。

アロンはこれを見て、その前に祭壇を築いた。そして、アロンは呼ばわって言った。「あすは【主】への祭りである。」』(32:4・5)

民の言った言葉に対して、アロンは金の子牛を台座としてその上に座られる方こそ主であると伝えています。自分が造った金の子牛を民が、「これがエジプトの地から連れ上ったあなたの神」だということばを正すために、「金の子牛を台座としてその上に座られる方こそ主だ」と言い換えたのです。

リーダーとして民をまとめることができなくなったアロンですが、神を畏れる心は持ち続けていました。

イスラエルの民の堕落

『そこで、翌日、朝早く彼らは全焼のいけにえをささげ、和解のいけにえを供えた。そして、民はすわっては、飲み食いし、立っては、戯れた。』(32:6)「戯れた」は「からかう、冗談を言う、戯れる、愛撫する、いたずらをする」という意味であり、無礼講や性的な罪がまかり通る大宴会だったのではないかと推測されています。

それゆえ、神は民が「堕落してしまった」とモーセに語っています。

人間の都合で、人間欲を満たすための神を作りました。宗教的な文化が世にはびこり、群衆全体が堕落していました。

神はモーセに神は彼らを「実にうなじのこわい民だ」と言い放ち、民を滅ぼすと怒って言われました。

本音で神にぶつかったモーセ

『しかしモーセは、彼の神、【主】に嘆願して言った。「【主】よ。あなたが偉大な力と力強い御手をもって、エジプトの地から連れ出されたご自分の民に向かって、どうして、あなたは御怒りを燃やされるのですか。また、どうしてエジプト人が『神は彼らを山地で殺し、地の面から絶ち滅ぼすために、悪意をもって彼らを連れ出したのだ』と言うようにされるのですか。どうか、あなたの燃える怒りをおさめ、あなたの民へのわざわいを思い直してください。

あなたのしもべアブラハム、イサク、イスラエルを覚えてください。あなたはご自身にかけて彼らに誓い、そうして、彼らに、『わたしはあなたがたの子孫を空の星のようにふやし、わたしが約束したこの地をすべて、あなたがたの子孫に与え、彼らは永久にこれを相続地とするようになる』と仰せられたのです。すると、【主】はその民に下すと仰せられたわざわいを思い直された。』(32:11～14)

力ある神は即座にご自身で、民を滅ぼすことがたやすくできたのに、なぜモーセと話されたのでしょうか。過去の失敗に心を縛られ、自分を責め続けてきたモーセに神の選びを強く握らせたのではないでしょうか。モーセのとりなしは、モーセの民に対する犠牲的精神、本音で神にぶつかっていく姿を見ることができます。神はそのまっすぐ言葉を聞いてくださいました。民の側に立ってとりなすモーセの姿は、かつて立ち上がることができなかったモーセが、本当のリーダーになったことを表しているようです。

モーセも自らの弱さゆえの失敗を赦され、神から信頼されたからこそ、民の堕落に対しても、責めるのではなく、神に赦しを求めてとりなして祈ったのです。モーセが自分の名が神の書物から消されてもよいというのは、自らが犠牲になっても、民を守るという大きな愛です。

清水次郎長の話

清水次郎長は、1820 年に駿河国（現在の静岡県）で生まれ、義理と人情にあふれるやくざの親分として有名です。

ある時、次郎長の子分が事件を起こし、捕らえられそうになりました。次郎長はその子分をかばい、自らが罪をかぶって牢に入ることを選びました。この行動により、次郎長は子分たちからの信頼を一層深め、彼の名声はさらに高まりました。清水次郎長が子分をかばって牢に入れられたエピソードは、彼の義侠心を象徴するものです。次郎長は、子分たちを非常に大切にし、彼らのために自らの身を犠牲にすることも厭いませんでした。このようなエピソードは、次郎長の人間性とリーダーシップを示すものであり、彼がただの侠客ではなく、人々に愛される存在であった理由の一つです。次郎長は、晩年には社会事業にも力を入れ、清水港の発展や富士山南麓の開墾に貢献しました。彼の人生は映画や小説、講談などで多く取り上げられ、現在でもその名は広く知られています。(ウィキペディアより情報を抜粋)

さいごに

私達は自分のやってしまったことをずっと後悔して、自分を責め続けていないでしょうか。

過去を振り返ると失敗と後悔。常に罪の意識に苛まれ、立ち上がっても、批判されたり、問題を押し付けられたりして、やっぱり私にはもう無理だと思う…。私達の毎日はそんなことの繰り返しかもしれません。

過去の失敗や傷に捉われて、神様の計画に生きる自信がなく、神様が願っておられる姿に立ち返ることができないでいないでしょうか。

今向き合っていること、任されていることの中で試練と思えることがあるかもしれませんが、モーセのように問題に陥っている民を神様に導くリーダーになってほしいと神様は願っておられます。神様は私達一人一人に、計画を持ち、その道に歩むことができるよう、愛し、信頼してくださっています。その大きな愛にすべてを委ねましょう。

（要約者：藤原 友規子）

（2024年8月11日）